

池田市埋蔵文化財発掘調査概報

1998年度

1999年3月

池田市教育委員会

序 文

池田市は大阪府の北西部に位置し、五月山の緑、猪名川の水の流れに囲まれています。このような自然の豊かな環境の中、人々が先史の時代から営み始めています。

近年はこの地も、陸・空の交通の要衝として、また、大阪のベットタウンとして開発が進み、大きく発展してまいりました。

しかしながら、このような開発、発展とは裏腹に、我々の祖先が伝え残してきた文化遺産や自然が破壊され、かっての面影がしづくことができないほど様がわりてしまったことも事実です。祖先から受け継がれてきた文化遺産を現代生活に反映しつつ、また、後世に伝えて行くことが我々の義務と考えております。

この報告書は、上述した状況の中、危機に面している埋蔵文化財について、国ならびに、大阪府の補助を受けて実施した発掘調査の概要報告であります。本書が文化財の理解に適ければ幸いと存じます。

なお、調査の実施にあたっては多くの御指示、御助言をいただいた諸先生並びに関係機関をはじめ、土地所有者、近隣住民の方々には文化財保護に対して、格別の御理解と御協力をいただきました。心より感謝と敬意を表し、厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

池田市教育委員会

教育長 長江 雄之介

例　　言

1. 本書は、池田市教育委員会が平成10年度国庫補助事業（総額1,000,000円、国庫50%、府費25%、として実施した埋蔵文化財緊急発掘調査の概要報告書である。
2. 本年度の調査および期間は下記のとおりである。

禪城寺遺跡第2次	池田市宇保町266	平成10年6月30日～7月10日
神田北遺跡第10次	池田市神田1-1268-2	平成11年1月4日～1月7日
3. 調査は、池田市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係が実施し、中西正和が現地を担当した。
4. 本書の執筆・編集は中西が行なった。また、本書の製図にあたっては野村大作・辻美穂の協力を得た。
5. 本書で使用する土層の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修）による。
6. 調査の進行にあたっては、施主並びに近隣住民の方々に深勘なるご理解、ご協力をいただいたことに対し、深く感謝の意を表する次第であります。

目 次

I	歴史的環境	1
II	禪城寺遺跡発掘調査	5
	はじめに	5
	調査の概要	5
	まとめ	9
III	神田北遺跡発掘調査	10
	はじめに	10
	調査の概要	11

図 版

図版 1 禪城寺遺跡第2次発掘調査

- (1) トレンチ全景（北から）
- (2) トレンチ全景（南西から）

図版 2 禪城寺遺跡第2次発掘調査

- (1) 竪穴式住居跡1（北から）
- (2) 竪穴式住居跡2（南から）

図版 3 禪城寺遺跡第2次発掘調査

- (1) 竪穴式住居跡3（南から）
- (2) 掘立柱建物跡（西から）

図版 4 神田北遺跡第10次発掘調査

- (1) トレンチ全景（南から）
- (2) トレンチ土層（西から）

挿図目次

I 歴史的環境

第1図 畑出土尖頭器	1
第2図 遺跡分布図	2
第3図 娯三堂古墳堅穴式石室	3

II 禅城寺遺跡発掘調査

第4図 調査地位置図	5
第5図 トレンチ位置図	5
第6図 トレンチ平・断面図	6
第7図 堅穴式住居跡1	7
第8図 堅穴式住居跡2	8
第9図 堅穴式住居跡3・4	8
第10図 掘立柱建物跡	9
第11図 出土遺物実測図	9

III 神田北遺跡発掘調査

第12図 調査地位置図	10
第13図 トレンチ位置図	11
第14図 トレンチ平・断面図	12

I 歴史的環境

池田市は、大阪府の西北部に位置し、東西4.1km、南北9.2kmの南北に細長い市域を有している。その位置は、西摂平野の北部、丹波山地に源を発する猪名川が北摂山地を分断して平野部に出たところにあり、古くから谷口集落として、大阪と丹波、能勢地方の物資集散、文化交流に中心的な役割を果してきた。

池田市の地形をみると、市域のほぼ中央に五月山塊が占め、それより北には、北摂山地および余野川によって形成された沖積平野が広がっている。また、五月山より南には、標高50~100mの緩やかな五月山丘陵が広がり、更に南側には、猪名川によって形成された広大な沖積平野が広がっている。このような自然環境の中、人々は旧石器時代から生活を営んでいたことが近年の発掘調査で明らかにされている。

旧石器時代

現在のところ旧石器時代に関する遺跡は少なく、遺物が出土した遺跡としては、伊居太神社参道遺跡・宮の前遺跡（螢池北遺跡）、宮の前西遺跡が挙げられるが、遺構に関しては未確認である。

伊居太神社参道遺跡は標高約50mの五月山塊西端部に位置し、明治年間から石器が採集され、その中に少量であるがナイフ形石器、尖頭器等の旧石器時代に比定されるものが認められている。宮の前遺跡では、昭和期から旧石器が収集され、また、発掘調査では、昭和61年度の大坂府教育委員会や平成元年度の豊中市教育委員会による螢池北遺跡で国府型ナイフ形石器が出土している。また、宮の前遺跡に隣接する宮の前西遺跡からは翼状剝片1点が採取されている。

縄文時代

五月山丘陵に位置している遺跡では、上述した伊居太神社参道遺跡で、縄文時代のサヌカイト製の石鏃、京中遺跡ではサヌカイト製の石鏃・石匕が採取され、近隣の畠ではサヌカイト製の尖頭器が採集されている。また、近年の発掘調査においては、池田城跡下層からサヌカイト製の石鏃、晩期の生駒西麓産突蒂文土器が出土している。一方、南部の台地に位置する神田北遺跡では石鏃・石匕、宮の前遺跡では石棒が採取されている。また、豊島南遺跡で後期から晩期の土器が出土している。しかし、出土した土器は少量で、また、遺構は検出されておらず、縄文時代の集落等



第1図 畠出土尖頭器



- | | | | |
|-------------|---------------|---------------|----------------|
| 1. 鹿ヶ瀬遺跡 | 2. 古江古墳 | 3. 古江北古墳 | 4. 古三瀬跡 |
| 5. 古江遺跡 | 6. 木津遺跡 | 7. 木津1号墳 | 8. 木津2号墳 |
| 9. 木船城山古墳 | 10. 愛宕神社遺跡 | 11. 伊賀太加社参道遺跡 | 12. 犬山古墳 |
| 13. 鎌倉堂遺跡古墳 | 14. 沢田北遺跡 | 15. 遠山大字山古墳 | 16. 月ヶ丘古墳 |
| 17. 鍋塚遺跡 | 18. 勝野1号墳 | 19. 勝野2号墳 | 20. 石楠古墳 |
| 21. 斧桶西遺跡 | 22. 奈有寺古墳遺跡出土 | 23. 京中遺跡 | 24. 豊郷遺跡 |
| 23. 丹波源吉墳 | 25. 銀塚古墳 | 27. 鈴原南遺跡 | 25. 銀塚古墳 |
| 28. 石柄古墳 | 30. 二子塚古墳 | 31. 鶴吹今遺跡 | 22. 宇佐信名御赤神社古墳 |
| 33. 幸保遺跡 | 34. 丹田北遺跡 | 35. 鎌原古墳 | 36. 門山遺跡 |
| 37. 神田南遺跡 | 38. 天神遺跡 | 39. 遠足古墳 | 40. 住吉・宮の前遺跡 |
| 41. 宮の前遺跡 | 42. 待兼山遺跡 | 43. 雄原 | |

第2図 遺跡分布図

の規模・性格等は明らかでない。

弥生時代

弥生時代前期の遺跡としては、五月山北麓に位置する木部遺跡が挙げられる。木部遺跡は工事中に発見された遺跡で本格的な調査がされていないため、詳細は不明である。しかし、弥生時代前期から後期の土器が出土しており、池田市内では唯一弥生時代全般を通じて営まれた遺跡である。弥生時代中期においては、台地上に位置する場所で遺跡が現れるようになる。宮の前遺跡は昭和43年・44年に中国縦貫自動車道建設にともない、大規模な発掘調査がなされ、方形周溝墓、竪穴式住居跡、土壤墓等の遺構が多數検出されている。

また、宮の前遺跡から西へ約1kmに位置する豊島南遺跡では方形周溝墓が検出され、宮の前遺跡との関連が注目される。後期に入ると、宮の前遺跡、豊島南遺跡は消滅し、かわって、五月山の丘陵上に位置する池田城跡下層、鼓ヶ滝遺跡、京中遺跡、愛宕神社遺跡等の遺跡が現れる。池田城跡下層では平成3年の調査において、ベット状遺構を伴う竪穴式住居跡が検出されている。また、台地では神田北遺跡においては、竪穴式住居跡、土坑が検出されているが、全体的に後期に入ると集落は五月山の丘陵に散らばり、小規模化する。

古墳時代

池田市内に残る古墳時代前期に築造された古墳は、池田茶臼山古墳と娘三堂古墳が挙げられる。この2つの古墳の主体部は共に竪穴式石室である。池田茶臼山古墳は五月山塊より派生する丘陵の鞍部に築造された全長62mの前方後円墳で、葺石、埴輪列が検出されている。一方、娘三堂古墳は池田茶臼山古墳より北西約500m離れた五月山中腹に位置する径27mの円墳で、石室内からは画文帶神獸鏡が出土した。また、平成元年度の調査の結果、同一の墓壙内に竪穴式石室と粘土椁が存在することが確認されている。古墳時代中期に至ると高塚式の古墳はなくなり、かわって、小規模な低壇丘古墳が宮の前遺跡、豊島南遺跡で見られるようになる。古墳時代後期では善海1・2号墳、木部1・2号墳、木部桃山古墳、須恵器の陶棺を持つ五月ヶ丘古墳のような単独、あるいは2~3基を1単位とする小規模な古墳が現れるが、群集墳は形成されない。しかし、一方で、巨大な横穴式石室を有する鉢塚古墳や前方後円墳の二子塚古墳が築造されており、この地域の古墳の中でも、異質の存在である。

古墳時代の集落遺跡としては、古江遺跡、木部遺跡等で須恵器や土師器が出土しているが、これらの遺跡では、遺構の詳細は判然としない。豊島南遺跡では布留式の土器を伴う焼失住居が検出され、現在のところ、市内において古墳時代前期の集落遺構が確認された唯一の遺跡で



第3図 娘三堂古墳竪穴式石室

ある。中期に入ると少しではあるが、検出遺構も増していく。宮の前遺跡では竪穴式住居跡が検出されており、また、豊島南遺跡では竪穴式住居跡、溝が検出されている

歴史時代

集落遺跡としては、宮の前遺跡で奈良時代の掘立柱建物跡・溝跡が検出されおり、豊島南遺跡、神田北遺跡においても奈良時代の掘立柱建物跡等が検出されている。寺院跡としては白鳳・天平時代の瓦が採取された石積磨寺があるが、未調査のため詳細は明らかではない。中世では神田北遺跡で掘立柱建物跡が検出されており、後白河院領として開発が推進された吳庭荘と関係するものとも考えられる。

室町時代から戦国時代にかけて、国人の池田氏が豊島郡一帯の政治、経済を掌握するようになる。その池田氏の出自の詳細は明らかではない。応仁の乱ごろから摂津守護細川氏の被官として勢力を拡大させていくが、永禄11年（1568）織田信長の摂津入国により、池田氏は降伏を余儀なくされ、ついには、元家臣荒木村重によって、その地位を奪われることになる。池田氏の居館であった池田城は、五月山塊から南方へ張り出した台地上の南麓に位置し、現在でも主郭は土壘や空堀が良好に残る。昭和43・44年に主郭部の一部が調査された際、礎石を伴う建物跡や枯山水様の庭園跡が検出され、また、平成元年度から平成4年度の調査では虎口、建物跡、小規模な石垣、内堀、埠列建物跡等を確認している。

参考文献

- 坂口重雄「地形と地質」「池田市史」各税編 1960年
富田好久「考古学上に現れた池田」「新版池田市史」概説篇 1971年
橋高和明「原始・古代の池田」池田市立池田中学校地歴部 1985年

II 禅城寺遺跡発掘調査

はじめに

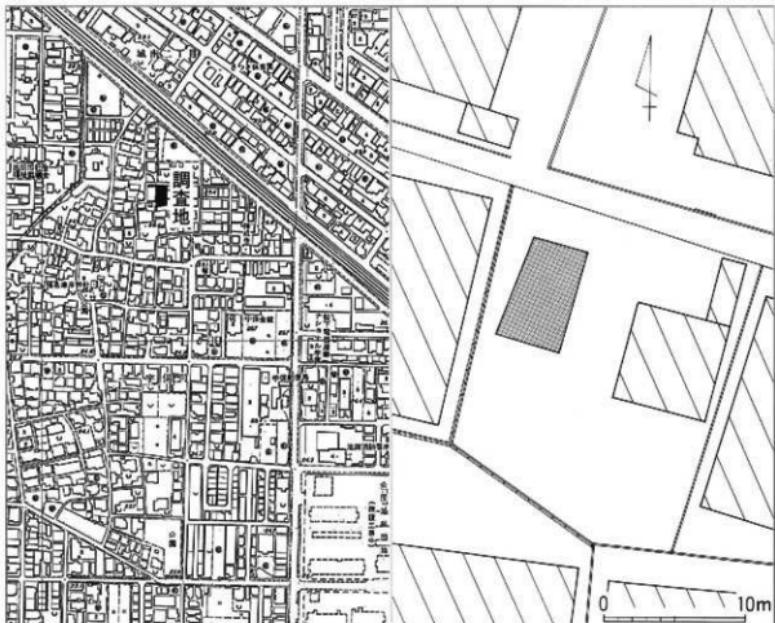
禅城寺遺跡は、宇保町・城南2丁目一帯に広がる弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。当遺跡は、昭和62年マンション工事中に中世の瓦が発見されたことからはじまるが、その後の調査は少なく不明な点が多い。

呉庭荘（今の宇保町・室町一帯）は、中世11世紀頃、土師氏によって、開発され、近辺を圧する勢力を誇っていた。平安時代後期の鳥羽院政期には皇室領となり、鎌倉時代に入ると皇室領からは離れ、農業信仰の牛頭天王を祭神とする呉庭總社を創設して、社領莊園として直接支配が図られた。善城寺も呉庭總社とともに氏寺として創建された。

禅城寺は坂上氏系譜に見られる善城寺と考えられ、平安時代後期の頃には建立されていたと考えられるが、詳しいことはわからない。

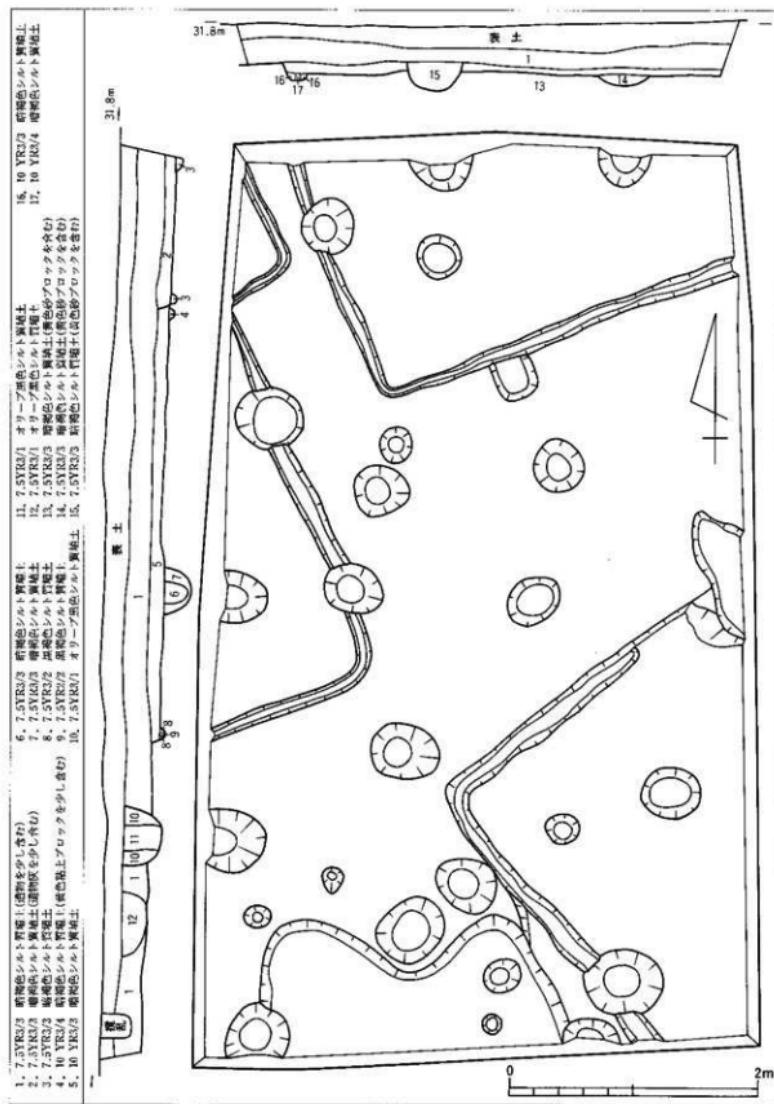
調査の概要

発掘調査は宇保町1982-2において、個人住宅建築工事に先立ち実施した。今回の調査地は池田市内中央にあたる平野部に位置するが、若干の台地地形でその縁辺部にあたる。調査面積



第4図 調査地位置図

第5図 トレンチ位置図



第6図 トレンチ平・断面図

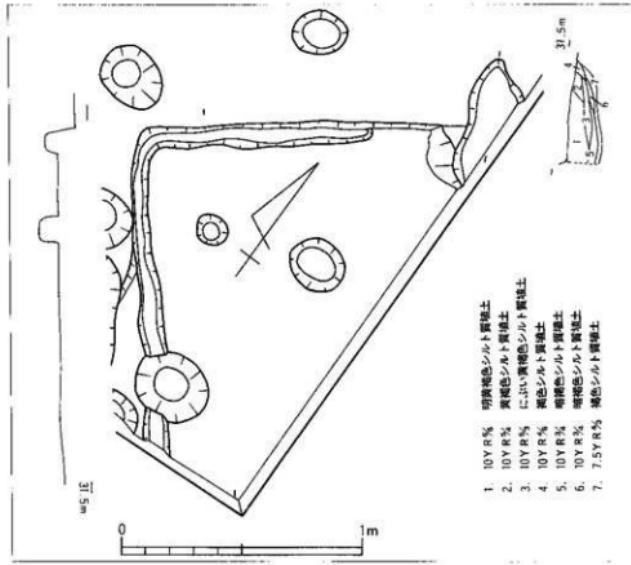
は32m²である。

基本層序については、第1層は表土及び盛土、第2層は耕土、第3層は奈良時代から弥生時代後期の土器を含む包含層、第4層は褐色シルトの地山である。

今回の調査によって見つかった遺構は竪穴式住居跡4基、掘立柱建物跡1基、その他、柱穴が多数である。

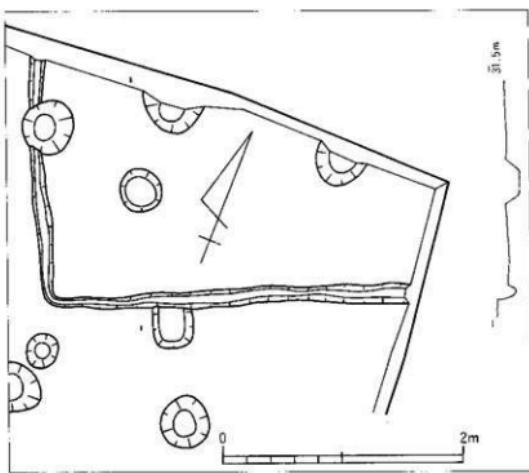
竪穴式住居跡1 調査区の南東部、地山面から見つかったもので、遺構は調査区外に伸びるため、全容はわからないが、方形プランを持つ住居で、調査では住居の北西部のコーナーと北辺にカマドを検出した。カマドの位置から東西の1辺が6.04mの規模であると考えられる。床部には張り床が確認されている。主軸方向はN-40°-Wである。北西コーナー部分で主柱穴1基が確認されているため、主柱穴が4本柱の構造されるものと考えられ、壁溝が巡る。壁高は約15cm、壁溝の幅は約12~20cm、深14cm、柱穴は径22cm、深さ19cmを測る。カマドは造り付けのである。カマドの袖は西部分の確認であり、全体はわからないが、長さ52cmで「ハ」の字状であろうと考えられる。燃焼部は床面より約10cm掘り下げておらず、また煙道部との比高差は約10cmを測る。煙道部の長さは60cmである。

竪穴式住居跡2 調査区の北東部、地山面から見つかったもので、遺構は調査区外に伸びるため、全容はわからないが、方形プランを持つ住居で、調査では住居跡の南西部のコーナー部分を確認した。主軸方向はN-40°-Wである。北西コーナー部分で主柱穴1基が確認されている。



第7図 竪穴式住居跡1

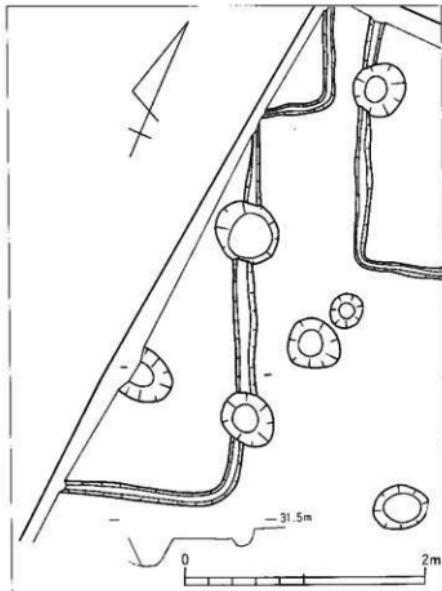
ため、主柱穴が4本柱の構造であると考えられ、壁溝が巡る。壁高は約8cm、壁溝の幅は約8~16cm、深さ10cm、柱穴は径50cm、深さ20cmを測る。出土遺物から飛鳥時代の住居跡と考えられるが、竪穴式住居1とは主軸方向の違い、住居同士の間隔の近さから、同時期に共立しあつたとは考えられない。しかしながら、時代の前後関係はわからないものの時代差はほとんどなく、きわめて近い時期に位置したと思われる。



第8図 竪穴式住居跡2

竪穴式住居跡3 調査区の西部中央、地山面から見つかったもので、遺構は調査区外に伸びるため、全容はわからないが、方形プランを持つ住居で、調査では住居跡の南東部のコーナー部分を確認した。主軸方向はN-22°-Wである。北東コーナー部分で主柱穴1基が確認されているため、主柱穴が4本柱で構造されるものと考えられ、壁溝が巡る。壁高は約8cm、壁溝の幅は約8~16cm、深さ10cm、柱穴は径50cm、深さ20cmを測る。出土遺物から飛鳥時代の住居跡と考えられるが、竪穴式住居跡1・2との時代関係はわからない。

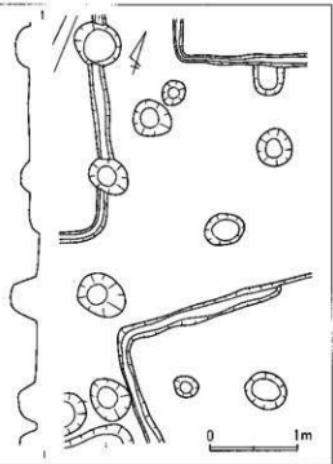
竪穴式住居跡4 調査区の北西部、地山面から見つかったもので、遺構のはほとんどが調査区外に伸びるため、全容はわからないが、方形プランを持つ住居で、調査では住居跡の南東部コーナーの一部分しか確認できなかった。主



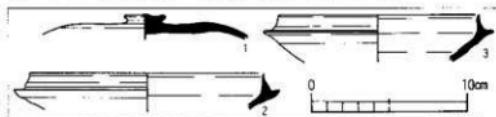
第9図 竪穴式住居跡3・4

軸方向はN-24°-Wである。北東コーナー部分では壁溝のみが確認される。壁高は約8cm、壁溝の幅は約8~16cm、深さ10cmを測る。出土遺物から飛鳥時代の住居跡と考えられる。土層の切り合ひ関係から竪穴式住居跡3よりは新しい住居跡と確認できるが、詳しい時代関係はわからない。また、竪穴式住居跡1・2との関係についても時代関係等はわからない。

掘立柱建物跡 調査では3間×1間の掘立柱建物が確認されたが、調査区外へ伸びていると考えられ、全容はわからない。主軸はN-20°-Wで、柱の間隔は桁行S P-1~150cm~S P-2~138cm~S P-3~115cm~S P-4で、梁行S P-4~184cm~S P-5である。桁行の間隔は均一性がなく、南にいくにつれて、若干間隔が狭くなる特徴がある。出土遺物から奈良時代と考えられる。



第10図 掘立柱建物跡



第11図 出土遺物実測図

奈良時代のものが中心である。1・2は竪穴式住居跡1から出土した須恵器の蓋、身で、1は上層出土である。3は竪穴式住居跡2から出土した須恵器の身である。

まとめ

調査区が限られた場所であったにもかかわらず、飛鳥時代の竪穴式住居跡4基、掘立柱建物跡1が確認することができたことは重要な成果があった。

竪穴式住居跡は4基を確認し、4基が共に飛鳥時代と考えられる。時代関係がわかるのは竪穴式住居跡3・4のみで、他はわからなかった。4基は共に近接しているため、同時期に存立したとは考えられず、竪穴式住居跡1と4は間隔が4.2mで共存できる間隔があるが、主軸方向が異なるため今回の調査では言及はできない。

調査区全面から柱穴を確認できたが、掘立柱建物跡を確認できたのは1基のみである。柱跡の残存状況もよく、他に建物跡が復元あるいは、調査区外に伸びている可能性は高いが、今後の周辺での調査に委ねられる。

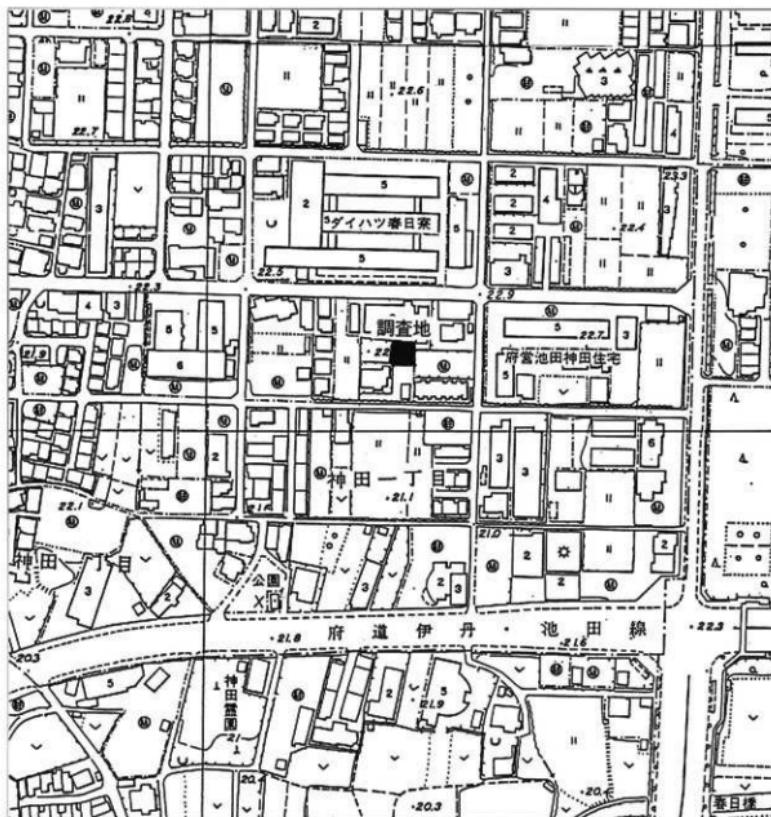
出土遺物については、今回の調査で弥生時代後期から奈良時代の遺物が中心で、それらの時期以外の遺物ではなく、平安時代から莊園として土地が利用されたため、奈良時代以降の遺物がないともいえるが、層位的な確認と平行して認識していくことが必要である。

III 神田北遺跡発掘調査

はじめに

神田北遺跡は池田市神田1・2丁目・八王子1丁目一帯にひろがる縄文時代から中世に至る複合遺跡である。当遺跡は、昭和50年に石鎌が発見されたことによる。それを契機に同年発掘調査が行われ、縄文時代の石鎌、弥生時代後期の土坑、古墳時代から奈良時代までの須恵器等が出土し、縄文時代から奈良時代までの複合遺跡であることが判明した。

その後、マンション・個人住宅等の開発に伴い発掘調査が実施され、その結果、弥生時代後期の竪穴式住居跡、古墳時代の掘立柱建物跡、奈良時代の掘立柱建物跡、中世の掘立柱建物跡



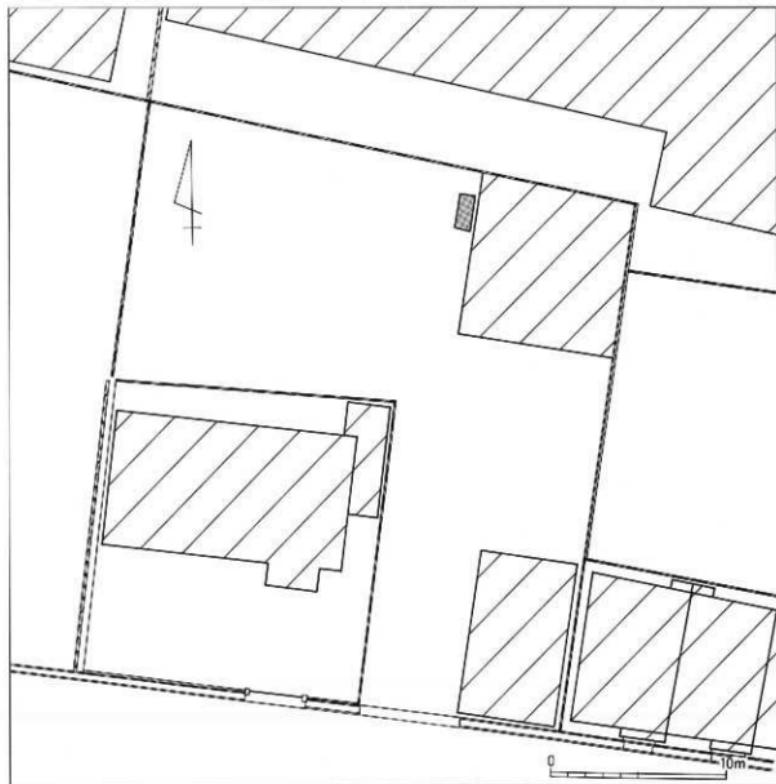
第12図 調査地位位置図

等が検出されるようになり、徐々にではあるが遺跡の性格等が明らかになりつつある。また、当遺跡より北に隣接する禪城寺遺跡からは飛鳥時代の堅穴式住居跡が検出されており、当遺跡との関連が注目される。平野部においては、弥生時代中期に人々が生活を営んだ宮の前遺跡・豊島南遺跡が弥生時代後期になると消滅していく。神田北遺跡においては、弥生時代後期に関する遺構が著名に残ることは注目される。

調査の概要

調査地は、神田1丁目1268-2に位置し、個人住宅建築に伴い発掘調査を実施した。調査面積は2m²である。

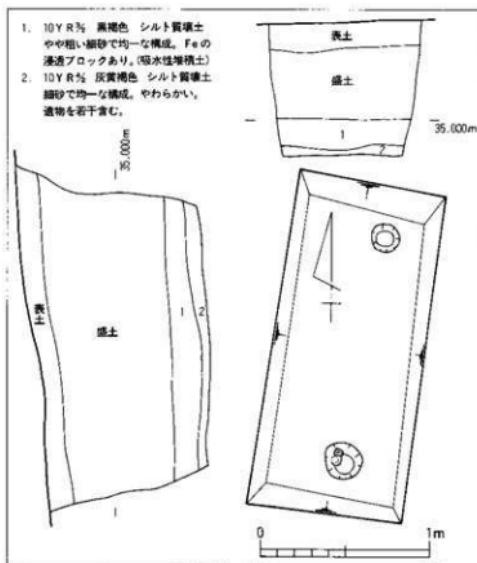
基本層序については、第1層は表土及び盛土、第2層は耕土、第3層は包含層、第4層は砂礫を多く含む黄褐色シルトの地山である。第3層の包含層からは若干の土器（須恵器）が出土



第13図 トレンチ位置図

したが、図化できるものはなかつた。

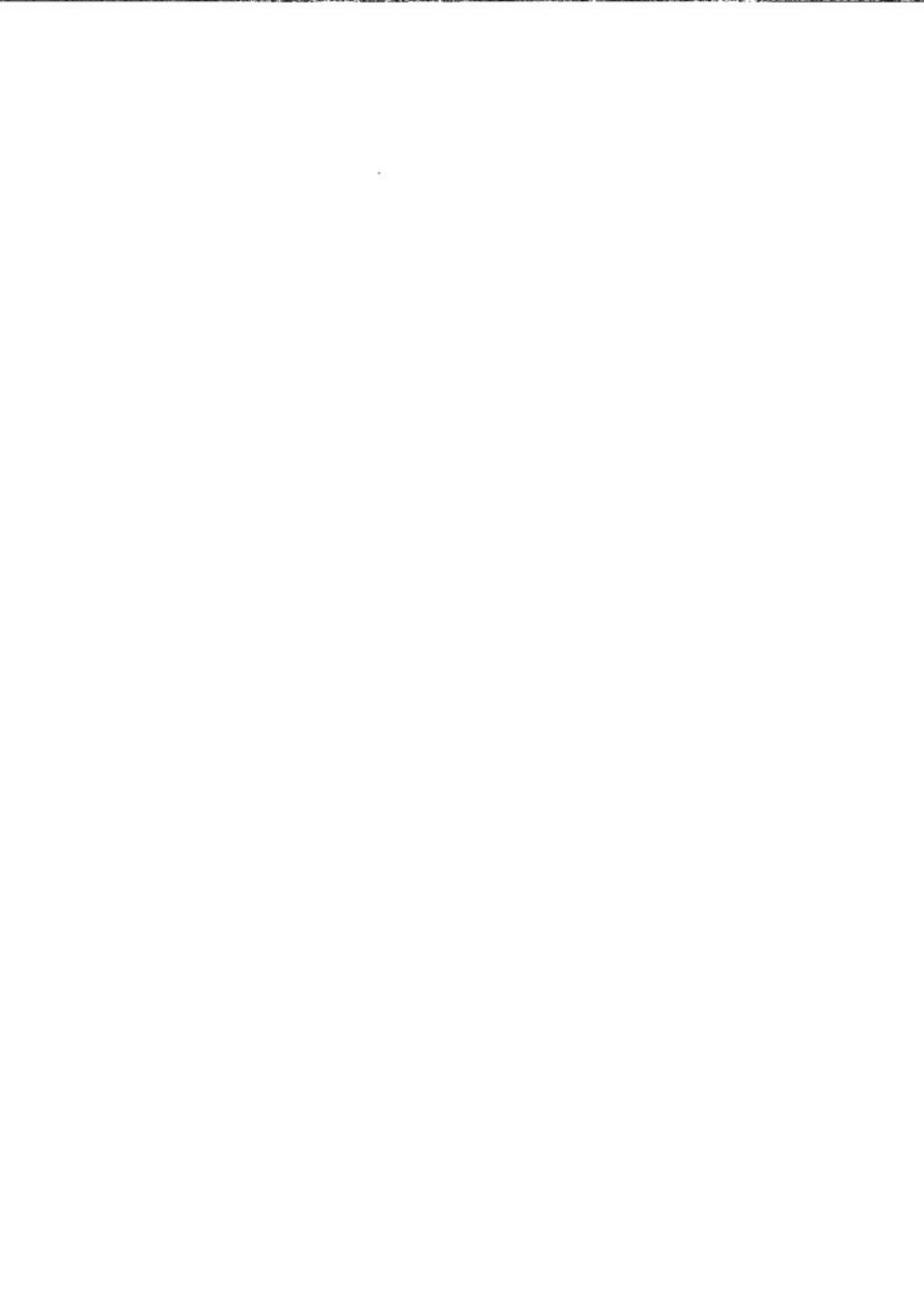
今回の調査において検出した遺構は地山面からピット2基のみで、深さも5cm前後で出土遺物もなく、時期の特定もできない。また、掘立柱建物跡の復元は調査面積が狭いため明らかではない。しかしながら、当遺跡では古墳時代から中世までの掘立柱建物跡が検出されており、今後における周辺での調査が注目される。



第14図 トレンチ平・断面図

報告書抄録

ふりがな	いけだしまいぞう、ぶんかざいはつくつちょうさがいほう							
書名	池田市埋蔵文化財発掘調査概報							
副書名	池田市文化財調査報告第24集							
卷次								
シリーズ名	池田市文化財調査報告							
シリーズ番号	24							
編著者名	中西 正和							
編集機関	池田市教育委員会							
所在地	〒563-8666 大阪府池田市城南1丁目1番1号 ☎0727-52-1111							
発行年月日	1999年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡					
禪城寺遺跡	池田市宇保町	272043	—	34度 49分 4秒	135度 25分 48秒	980630 ～ 980710	32m ²	個人住宅新築のための事前調査
神山北遺跡	池田市神田	272043	—	34度 48分 44秒	135度 25分 47秒	990104 ～ 990107	2 m ²	個人住宅新築のための事前調査
所取遺跡跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
禪城寺遺跡	集落跡	弥生～中世	竪穴式住居跡	弥生土器	竪穴式住居跡4基 掘立柱建物跡1基			
神田北遺跡	集落跡	縄文～中世	ピット	須恵器	ピット2基			





(1) トレンチ全景（北から）



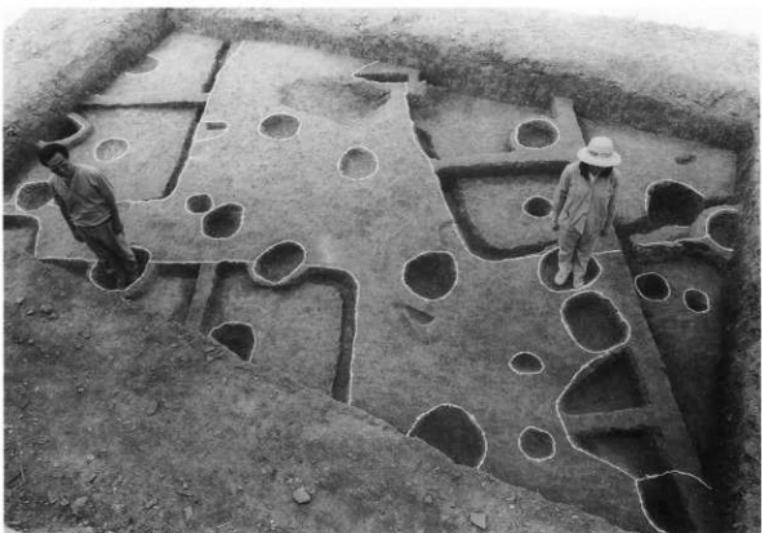
(2) トレンチ全景（南西から）



(1) 積穴式住居跡 1 (北から)



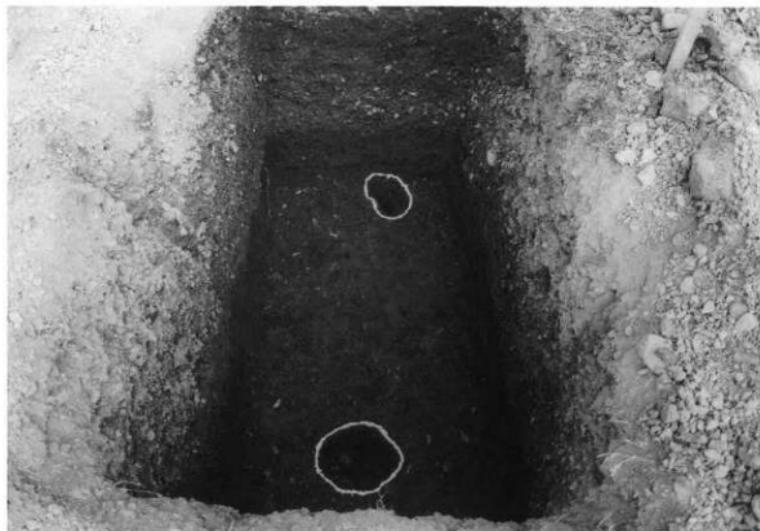
(2) 積穴式住居跡 2 (南から)



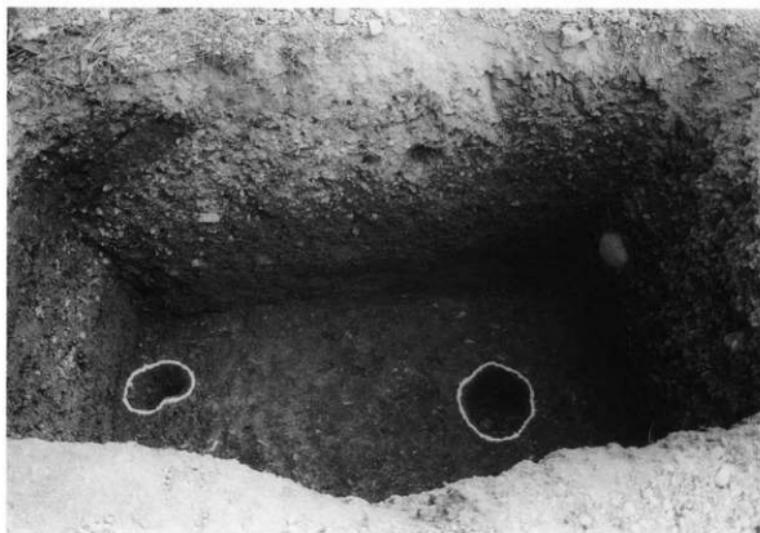
(1) 竪穴式住居跡 3 (南から)



(2) 挖立柱建物跡 (西から)



(1) トレンチ全景（南から）



(2) トレンチ土層（西から）

池田市文化財調査報告第25集
池田市埋蔵文化財発掘調査概報

1998年度

1999年3月

発行 池田市教育委員会

池田市城南1丁目1番1号

編集 社会教育課 文化財係

印刷 やまかつ株式会社